

深海を生きる

先日、トリノアシという生き物がいることを知った。ニワトリの足の先が何十本も枝分かれしてカールし、その一本ずつに羽が生えたような形状をしている。全体が白っぽくて、ぼきりと折られた小枝が枯れ草のようにしか見えない。しかし、れっきとした動物なのである。ウニやヒトデと同じ棘皮動物で、ウミユリの一種だそう。色鮮やかな棘皮動物もいるが、トリノアシは、光が届かない深海で暮らすためか、色が無い。

これを見たのは、静岡県にある沼津港深海水族館で、「五億年も前から姿を変えずに生きている『生きる化石』の一つ」とのこと。

五億年……。なんという長い年月だろう。枯れ草のようなその姿からは、どのように子孫を増やしているのか分からないが、光の届かない海の底で羽のようなものを水にそよがせ、はるかな時を同じ形で生きてきたのだ。きっと、幸や不幸といった概念は

これは短歌ではなく、明石海人の第一歌集『白描』の序文の中で、創作の矜持を述べたものである。明石は大正一五年に二五歳のときにハンセン病に感染し、教師の職を辞し、妻子とも別れて各地で療養生活を送ることになる。やがて病は進行し、失明した。さらに咽頭切開をしなければならなかった。視力を奪われ、声を発することもできない過酷な状況の中で、「深海に生きる魚族」にシンパシーを抱いていたのだらう。そして「自らが燃えなければ何処にも光はない」という言葉を絞り出したのだ。内なる情熱で身体を燃やして生まれた炎を言葉に変えたのだ。

シルレア紀の地層は杳き^{とほ}そのかみを海の蠍^{さそり}の我も
棲みけむ
同

『白描』収載の一首である。「海の蠍」はすでに絶滅した古生物である。遠い昔の地層の中に、海の蠍として自分もかつて棲みついていたかもしれない、という夢想が描かれている。前世を想像する幻想的な歌だが、「我も棲みけむ」という結語には多くの仲間たちとそこで暮らす様子まで浮かんでくる。そんな具体的な想像が、深い闇の中で不自由な状態にいる現実と対比的に詠まれたようで切なくなる。この歌集は昭和一四年に出版され、その四ヶ月後に明石はこの世を去った。もしかしたら今ごろ、深海の生き物としてしずかに生きているのかもしれない。私が「トリノアシ」を見た沼津で、明石も生まれ

歌人／作家 東直子
ひがしなおこ



撮影：小野田光

持たないままに。喜怒哀楽のような感情は、少しは存在するのだろうか。彼らが人間に認識されたのはいつのことなのだろう。

海底^{うみぞこ}に眼^めのなき魚の棲む^すといふ眼の無き魚の恋しかりけり
若山牧水

この短歌は、若山牧水が二十代のとき、五年に及ぶ初恋がやぶれ、失意の中で詠まれた歌である。恋の苦悩が、海の底にいるはずの眼の退化した魚に憧れる気持ちへと繋がったのだろう。この歌が収載されている『路上』という歌集は、明治四四年に出版されている。この頃には、海の底に眼の退化した深魚がいることは周知されていたとわかる。

深海に生きる魚族のやうに、自らが燃えなければ
何処にも光はない
明石海人

ている。沼津港のある駿河湾は最深部が二五〇メートルと、日本一の水深を誇る。前述の若山牧水は、人生の半ばで沼津という土地に魅かれて一家で移り住み、この地で亡くなった。深海の生き物に思いを寄せた歌人二人が、深海に近い街に住んでいたという事実^{じじつ}に胸が熱くなる。

生きていると、もやもやしてしまうことも多いが、目を閉じて、深海の景色を想像しているうちに、不思議と心が落ちついてくる。トリノアシ、シーラカンス、リュウグウノツカイ、ダイオウグソクムシ、チョウチンアンコウ、メンダコ……。深海に生きている者の名前を唱えると、さらに落ちつく。想像することもできない彼らの日常を思うと、胸のもやもやも深海の底へと溶けていく。



トリノアシ



ダイオウグソクムシ

時の調べ Essay

略歴
第7回歌壇賞、第31回坪田譲治文学賞（いと森の家）受賞。
歌集『春原さんのリコーダー』『青卵』、小説『とりつくしま』『ひとつこひとり』、詩集『朝空が見えます』、エッセイ集『レモン石鹸泡立てる』『魚を抱いて』、歌書『現代短歌版百人一首』など著書多数。最新刊は短編集『フランネルの紐』。